

文化社会学の基礎問題・序説

門 部 昌 志

Problèmes Fondamentaux de la Sociologie de la Culture : une Préface

Masashi MOMBE

Résumé: C'est du fondement de l'analyse culturelle qu'il s'agit dans cet article. En ce qui concerne les différentes significations du mot «culture», on peut trouver des usages historiques divers. D'abord, nous traiterons les sens de la «culture» et celui *des* «cultures». W. Griswold a développé un schéma d'analyse des cultures qui souligne les relations entre le créateur, le récepteur, le monde social et l'objet culturel. Nous mentionnerons ce modèle en tant qu'un exemple parmi d'autres des différents cadres d'analyse culturelle. Toutefois, selon B. Latour, les distinctions entre la nature et la culture, entre la nature et la société, ou encore entre l'humain et le non-humain sont les résultantes d'une posture critique qui consiste à réduire tout réseau hybride à une simple dichotomie. C'est sur ces dualismes que la plupart des analyses culturelles se fondent. Dans un article publié dans la revue *Cultural Studies*, T. Bennett a déjà traité ce problème fondamental. L'analyse culturelle, est-elle aujourd'hui encore possible? Et si oui, quelle est-elle? C'est sur ces questions que nous allons tout particulièrement nous pencher.

この論考において問題となるのは文化分析の基礎である。「文化」の意味に関しては、様々な歴史的用法を見出すことができる。まず、我々は、文化、あるいは諸文化の意味を扱うであろう。W. グリスウォルドは、創造者、受容者、社会的世界、そして文化表象体の諸関係を強調する文化分析の図式を展開した。我々は文化分析の枠組みの一例としてこれに言及するであろう。しかしながら、自然/文化の区別、自然/社会の区別、あるいは人間/非人間の区別は、B. ラトゥールによれば、異種混交的なネットワークを二項対立に還元する批判的立場によって生み出されたものである。多くの文化分析が基礎にしているのはこれらの二元論なのである。雑誌、『カルチュラル・スタディーズ』に発表された論文で、既にT. ベニトは、この根本的問題を論じた。今日、文化分析は可能であるのか。もし可能であるならば、それはどのようなものか。本稿で我々が取り組むのはこれらの基礎的な問いである。

1. はじめに

「文化(culture)」の意味をめぐる議論は、もはやお定まりのものと言えるかもしれない。すなわち、自然の成長物の世話といった古い語義から始まり、教化や文明といった啓蒙主義的な背

景をもつ語義を経て、さらには生活様式といった包括的な定義へ。さらに、象徴に具体化された意味の、歴史的に伝達されたパターン、あるいは意味付与实践というより限定された語義。「文化」という言葉の歴史を踏まえた文化社会的枠組みの例としては、W・グリスウォルドの議論が挙げられる（Griswold, 1994:15 = 1998:32）。彼女の議論は、形態に具体化された共通の意義としての「文化表象体(cultural object)」を研究対象とし、創造者と受容者、文化表象体と社会といった諸要素の関係が描き出す二次元のダイヤモンドを分析の手がかりとするものである¹。文化のダイヤモンドと呼ばれるこの図式は、『変容する世界における諸文化と諸社会』と題された書物において提示されており、その副題が邦訳では「文化社会学入門」となっていることに、議論の特徴を見て取ることもできるであろう。

このような図式は、学生を誘う上で一定の役目を果たすものと思われる。他方、文化とは何か、いかに文化を分析すべきかという問いに対峙する者は、文化分析を行う基礎それ自体にも注意をむけるはずである。2007年に公表された論文を例にとれば、「第二派カルチュラル・スタディーズ」の構想を提示したS.ラッシュの論考では、従来のヘゲモニー論に基づく分析ではなく、新たな権力概念が素描されている(Lash, 2007)。この論考に対しては、彼が否定しているのは特定のグラムシ解釈のヴァージョンにすぎないという指摘もなされている(Johnson, 2007)²。もっとも、本稿では、ヘゲモニー論に関する議論に立ち入ることはできない。しかし、具体的な対象の分析を行うのではなく、文化分析の枠組みそれ自体を検討するという点は、本稿も同様である。このような意味で、本稿は基礎的な問題に照準を合わせている。とはいえ、副題が示す通り、本稿は序説としての限界を孕んでいる。根本的な問題への展望を示した上で、説得力のある新たな方向性を指し示すこと。本稿の主要な課題は、そうした作業に向けた準備を行うことにある。重要な問題の輪郭を素描し、その所在を指し示すことが目指されているのである。

さて、本稿で扱われる問題が基礎的と形容されるのは、それが文化をめぐる枠組みそれ自体を考察するという点においてであった。枠組みに関する議論としては、分析の前提となる二項対立の批判的検討がなされてきたのは周知の通りであろう。たとえば、1990年代前半には、J.ストーリーが、高級文化と民衆文化といった二項対立への批判を、文化理論の概説書に盛り込むまでになっていた(Storey, 1993:157-160)³。この著作の刊行から早くも十年以上が経過したことを考慮すれば、文化分析の前提となる二項対立への批判的検討は、もはや懐古的な営為にすぎないというべきであるのだろうか。

文化分析の外部に目を転ずるならば、必ずしもそう確言すべきではないことが判明する。周知のように、B.ラトゥールはアクター・ネットワーク理論(以下、ANTと略記することがある)に関する著作で知られており、さらには“sociology of associations”,あるいは“associology”といった言葉を用いる人物である⁴。『我々は決して近代的ではなかった』のなかで彼は、非人間としての自然/人間の文化といった区別への批判的作業を行っている。文化という言葉の歴史を辿ると自然と文化の区別が浮彫りになる以上、このような批判的見解は、文化を考察する者にとって看過できないはずである。そして実際、文化と自然の二分法に対する批判を摂取しつつ、従来とは異なる文化分析を模索する試みとして、T.ベニト⁵の論考が刊行されているのである(Bennett, 2007)。

以下、本稿では、文化という言葉について、その用法の変遷を辿りつつ、自然や文明、社会とこの言葉との関係を跡づける。そして一般的な文化社会学の枠組みを踏まえ、それらが種々の二項対立に依拠していたことを確認したい。さらに、自然と文化といった区別に関する議論にも注意を払いながら、現代における文化分析の基礎問題の輪郭をデッサンすることにしたい。

2. 「文化」の使用法

かつてR・ウィリアムズは、cultureは英語で最も複雑な言葉のうちの二、三語に入ると述べた。ある言葉が異なる作家や学問体系において用いられ、異なる意味を担われた結果、語義が錯綜することが考えられる。この言葉の場合、そうした事情に加えて、英語、仏語、独語など、ヨーロッパの複数の言語にまたがって複雑な歴史的展開を遂げている。結果として語義の複雑さが増したようにも思われる。

以下では、主としてウィリアムズに拠りながら、「文化(culture)」という言葉の歴史的な変遷を整理する。ある言葉の歴史を辿る場合、言葉の起源から出発し、様々な意味を整理し、そして言葉の適切なし厳密な意味を探求するというアプローチがある⁶。あるいは、夥しい数の文化に関する定義や陳述を採集、分類、分析した上、妥当な定義を導き出す、クローバーとクラックホーンによる驚嘆すべき著作も想起される。しかし、言葉の歴史を辿り、様々な用法を検討する企てが常に、ある言葉の超越的な語義を追求する探求に還元されるわけではない。ある文脈を背景に他の語との相互関連において用いられ、時に変形されていく、言葉の使用法の歴史を浮彫りとし、さらには複雑な含蓄の絡み合いを照らし出す営為と考えることもできるはずである。以下では、このような方向性を目指しつつ、「文化(culture)」という言葉をめぐる用法の整理を行いたい。その作業を通して、この言葉の含蓄的な絡み合いの諸相を想像するための暫定的拠点が明確になるはずである。

以下の試みは、各時代の用法の背後にある思考の枠組みを浮彫りにすることをも狙いとしている。従来の研究では、文化と社会、あるいは文化と文明の対立が注目されてきた。以下では、文化と自然の関係にかかわる思考の枠組みにも留意しながら、文化の用法の変遷を確認する。

2.1. 耕作、自然の成長物の世話

まず、初期の語義を確認することにした。「文化(culture)」という言葉の歴史を遡行すると、ラテン語にたどり着く。culturaという言葉には⁷、耕作・手入れといった主要な意味があり、また、キケロにおけるように、「精神の養育(*cultura animi*)」といった意味で用いられ、さらには、尊敬や崇拜といった中世的で副次的な意味も持っていた。これがフランス語に入って、coutureとなり、後には、「culture(耕作)」となって、15世紀初めまでに英語の一部となった⁸。当時の主要な意味は、農業や「自然の生育物の世話(the tending of natural growth)」であった(Williams, 1983:87 = 2002:83-84)。「文化(culture)」という語は、初期において、「過程を示す名詞」として、また、基本的には農作物や家畜など、「何かの世話をすること」として用いられたのである。このような意味は、R・ボウコックによれば、「農業(agriculture)」や「園芸学、園芸術(horticulture)」といった言葉に保持されている(Bocock, 1995:151)。

2.2. 養育、芸術、民衆文化

16世紀初め以降、「自然の生育物の世話(the tending of natural growth)」という意味は、メタファー的に転用されるようになり、「人間の発達過程」という意味に拡大される。このような意味が、18世紀末、19世紀初めまでは「耕作」と並ぶ「文化(culture)」の主要な語義であったとされる(Williams, 1983:87 = 2002:84)。当初、「人間の養育」という用法は、メタファーであったのだが、習慣化されることによって直接の語義と考えられるようになったのである。「文化(culture)」という言葉が、「自然の生育物の世話」のみならず、「人間の養育」をも意味するようになった点は興味深い。これらの用法に関連して留意しておきたいのは、自然と人間の関係に

関連するということである⁹。

「文化(culture)」という語は、18世紀までに階級特有の響きをもつようになる。例えば、ヨーロッパの裕福な階級のみが高度な洗練を熱望できる等々。この用法に密接に関連するのが、芸術と結びついた「文化(culture)」の用法である。すなわち、音楽、文学、絵画と彫刻、演劇などとして理解される文化である。他方、20世紀において「文化(culture)」の意味は拡大されてきたのであり、労働者階級や下層中産階級の「民衆文化(popular culture)」をも含意するようになった。こうして高級文化/民衆文化の下位区分が存在するようになるが(Bocock, 1995:151)、他方ではそうした区別を横断するような作品や議論なども20世紀には存在した。

2.3. 文明化と啓蒙主義

次の語義を説明するには、「文化(culture)」と「文明(civilization)」との複雑な関係が重要なものとなる。これらの言葉は、場合によっては、対立的に把握されることもあれば、同義語として用いられることもあり、事情は込み入っている¹⁰。時代や国、論者によって定義が異なるため明快な説明は困難である。ここでは、ひとまず、ウィリアムズの説明に沿って、英語における語義をみてみたい。

「文明(civilization)」の同義語として「文化(culture)」が用いられることがあるが、ここでは二つの用法を確認したい。一つは、「文明化」され、「教化(cultivated)」された状態へと変わっていく「一般的過程(general process)」を示す抽象的な意味である。なお、ウィリアムズによる『キーワード辞典』の新たな邦訳では、この general process という言葉は「社会全体の過程」と訳されている¹¹。二つ目の語義は、啓蒙主義の歴史家たちが civilization に対して確立していた語義であり、18世紀に普及した形態の世界史観において「人間発達の長期的な過程(the secular process of human development)」¹²を記述する用法であった(Williams, 1983:89 = 2002:85)。この「文化(culture)」の語義で留意したいのは、文明のみならず、啓蒙主義や社会との関連が背景にあることである。

なお、18世紀のフランスにおいて「文化(culture)」は常に単数形で用いられたようである。これは哲学者たちの普遍主義とユマニズムを表している。当時の哲学者にとって、文化は人間の本性なのであり、「民族(peuple)」や階級などのあらゆる区別を超えたものと考えられた。したがって、「文化」は、啓蒙のイデオロギーと密接に結びついていた。この言葉は、進歩や進化、教育、理性などの観念と結びつけられたのである(Cuche, 2001:9)。

2.4. 文化における複数性

ここまでの議論は、単数形における文化をめぐるものであった。これに対して、複数の文化を提唱したのが J. G. ヘルダーである。ウィリアムズの解釈によると、文化ないし文明(人間性の歴史的な自己発展)は、現代の我々が単線的過程と呼ぶであろうものであり、それが18世紀ヨーロッパ文化の高みに到達するという普遍史の仮定をヘルダーは非難した。優越したヨーロッパ文化という見解を批判する彼は、複数形における文化について、すなわち「諸文化(cultures)」について語る必要があると論じた。この言葉によって、異なる国家と異なる時代の個別的で可変的な諸文化ばかりではなく、一つの国家内部における社会的・経済的諸集団の個別的で可変的な諸文化も指し示されることになる。この語義は、ロマン主義運動において、オーソドックスで支配的な「文明(civilization)」という言葉への対案として広範に発展した。それは当初、ナショナルで伝統的な諸文化を強調するために用いられたが、「民俗文化(folk-culture)」といった新たな概念をも含んでいた。次第に、文化という言葉は、抽象的な合理主義や産業的発展の「非人間性

(in-humanity)」など、新しい文明の機械的な特徴と見なされたものを攻撃するために用いられるようになる。人間の発展と物質の発展を「区別する」ために用いられたのである(Williams, 1983:89=2002:85-86)。なお、ウィリアムズの解釈を踏襲したボウコックは、この系列の文化の用法を、「特定の諸国家や諸集団、諸階級、諸時期に共有された諸意味や諸価値や生活諸様式」とまとめている(Bocock, 1995:154)。

進歩史観やヨーロッパの自民族中心主義に対する批判、そして近代文明への批判など、ウィリアムズの指摘するヘルダーの視点は興味深いものである。また、特にここで留意したいのは、文化という言葉が、文明の機械的な特徴と対立するものとして捉えられるようになり、「人間」の発展と「物質」の発展を「区別」するものになったという論点である。グリスウォルドによると、19世紀ヨーロッパの知識人たちの多くは、文化と社会の対立、あるいは文化と文明の対立を主張した。この場合、「文明」が指し示すのは、当時において顕著だった産業革命の技術的進歩と産業化に伴う社会変動であった。文明に文化を対置することは抵抗であった。すなわち、啓蒙主義的思考、進歩はいつも有益であるという信念、工業化の醜い側面、そして、全ての人や物を経済的な基礎に基づいて評価する資本主義の金銭的關係などに対する抵抗であったのである。この文脈において、文化は、過度に文明化された人間存在を救済する手段と見なされた。文化と文明の二分法においては、工業文明の疎外的で非人間的な帰結に対して、癒しや悦びをもたらす文化の力が対置されたのである(Griswold, 1994:4-5=1998:18)¹³。このような議論の系列にあるものとして、F.R.リービスによる薄くて小さなパンフレット『大衆文明と少数派文化』(1930年)、さらにはM.アーノルドの『教養と無秩序』(1869年)などが挙げられよう。

さて、「人間」の発展と「物質」の発展の区別に関するウィリアムズの指摘は留意すべきものであったが、文化における単数と複数数の問題について彼はあまり多くを語っていない。アレクサンダー・アスマンは、ヘルダー、および文化における単数性と複数性の問題に関して以下のように論じている。まず、アスマンは、文化を単数形で思考する見方として、自民族中心主義と委譲モデルを挙げている。さらに、その複雑なヴァージョンとして、文化の多数性のなかに単一性を見出す思考をも含めることができるかもしれない。第一の自民族中心主義は、自らの文化以外のものを「自然、野生、蛮族」の状態にあるとする見方である。第二の委譲モデルは、唯一の文化(「叡智」)が時間順に各地に継承されると考える、権威や文化の輸送モデルである。それはヨーロッパの歴史と結びつき、その世界帝国継承権の主張に関連している(Assmann, 2001:283)。

第三は、文化の多数性のなかに、隠された単一性を見出す思考である。アスマンによれば、ルネサンス期に諸母国語を基礎とする力によって新しい国民文化が成立した。それが基盤となり、委譲モデルのレトリックに異議申し立てがなされるようになったという。権威ある唯一の文化が順に各帝国に委譲されるという考え方は説得力を失い、文化における相互的な交流や競争が、そして文化の多様性が重要になった。文化や宗教に関する攻撃的で排他的な権利主張に対して、それらの平和共存を願う人文主義者たちは、顕在的多数性の奥底に単一性があることを主張した。これは文化の多数性を前提としているものの、最終的にはそれらを単数のものに回収する思考と見做せるかもしれない。さらに、アスマンは17世紀薔薇十字会の宣言から、普遍主義的ヴィジョンを読み取っている。その宣言において、ギリシア人、ユダヤ人、異教徒、そしてキリスト教徒におよぶ普遍的な叡智は、すべての点を中心から等距離にある円によって理解されている。換言すれば、文化や宗教の複数性をまとめるような一つの精神的・普遍主義的なヴィジョンがあるとされたのである。「普遍主義的な単一性ヴィジョン」は「儀式的多数性の背後に唯一の宗教を見、言語の多様性のうちに同一の内容を聴く」のである(Assmann, 2001:285-286)。

文化の複数性に隠された単一性を見出す思考は、すべての点が中心から等距離にある円の比喻から出発していた。これに対し、ヘルダーは、円よりも球の比喻を用いた。しかも、全宗教および文化に共通な単一の中心を、多数の自足的な中心で置き換えたのである。互いに隔絶された文化圏。それは、自由な交換と交通のための視点を許容しないのであり、文化の相互的な関係を解消するものであった。これがヘルダーのアポリアであった(Assmann, 2001:287-296)。

2.5. 意味, 価値, 生活様式

ヘルダーは、単なる文化ではなく、諸文化について語らねばならないと主張した。諸国家が、そして諸国家内部の共同体が、あるいはそれらをこえた諸共同体が、それぞれ等しく価値のある、様々な文化をもっているからである(Griswold, 1994:8=1998:22)。既に述べたように、ボウコックの理解では、諸文化という言葉は、特定の諸国家や諸階級、諸集団、諸時期に共有された諸意味や諸価値や生活諸様式を指し示す(Bocock, 1995:154)。ある社会における生き方として文化を捉える見解は、文化対文明論争を退けたE. B. タイラーによってイギリスの文化人類学に導入された(Griswold, 1994:8 = 1998:22)。『原始文化』のなかでタイラーは、文化を以下のように定義している。「広い人類学の意味でいう文化あるいは文明とは、知識・信仰・芸術・法律・習俗・その他、社会の一員としての人の得る能力と習慣とを含む複雑な全体(complex whole)である」(Tylor, 1873:1=1962:1)⁴。このように生活様式として文化を考えた場合、自民族中心主義やエリート主義を回避することができるという利点がある。他方、全てを包括する定義は、精密さに欠ける(Griswold, 1994:8 = 1998:22)。多様なものを包み込むべく拡張されることによって、かえって概念としての操作性が失われる。文化の包括的な定義に孕まれるこの難点を経過したのち、文化と意味の関連をより重視する見解が現れる。私たちは次に、現代の文化分析において一般化した用法を確認することにしよう。

2.6. 意味付与实践

『文化の解釈学』においてギアーツは、文化を以下のように定義する。「文化は、象徴に表現される意味のパターンで、歴史的に伝承されるものであり、人間が生活に関する知識と態度を伝承し、永續させ、発展させるために用いる、象徴的な形式に表現され伝承される概念の体系」を表している(Geertz, 1973 = 1987:148)。この著作でギアーツが、「コード化されたプログラム」や「文化のパターン」に言及する点にも、留意しておきたい。

意味との関連を重視する立場としては、文化を「意味付与实践(signifying practices)」とする見解がある。次に、ボウコックの議論を参照しつつ、しかし、それとは独立に、このタイプの用法を確認することにしたい。まず、文化という言葉の意味付与实践と見做すことは、物(芸術)や状態(文明)としてではなく、諸実践として文化を位置づけることである。この見解において、言語活動は基礎的な社会的実践である。というのも、社会は諸個人間の諸関係を通して生起するのであるが、それは、コミュニケーション能力 意味を交換し、共有された文化を創る なしには成立しえないのだから。

この見地において、本質的な意味という観念は否定される。意味を付与するのは、記号や象徴(言葉や絵などの)を用いながらコミュニケーションする能力である。ただし、言語のように作用するのは言語のみではない。様々なものが言語のように機能しうる。たとえば、二つの木を釘でとめて作った十字。キリスト教の信仰が広まっている国であればそれは明確な意味を帯びるはずである。また、サブカルチャーを背景として生起する非宗教的な意味も考えられよう。ジーンズは余暇や形式張らないスタイルを意味したり、ある状況では反抗を意味したりするであろう。

さらに、ジーンズの種類によっては、他との相違により、希少性や贅沢さの意味を帯びることも考えられる。これらのような物以外にも、身振りが意味を帯びることがある。時にそれは言葉で語られた事柄を枠付けたり、枠付けられたりするかもしれない。いずれにせよ、この用法において、分析の一つの焦点となるのは、意味を産出する諸実践、あるいは意味を生み出すために記号や象徴を使用する諸実践であり、それらはしばしば意味付与实践と記述される(Bocock, 1995: 153)。

3. 文化社会学の基礎問題

3.1. 文化社会学の枠組み

文化という言葉をめぐる、その主たる用法を確認してきたわけである。次に、私たちは、グリスウォルドによる文化社会学の枠組みを確認し、その特徴と限界を検討することにしたい。もっとも、ここでの主たる目論見は、グリスウォルドの枠組みそれ自体の紹介にあるのではない。むしろ、あるオーソドックスな枠組みに論評を加えることによって、一般的な文化社会学の枠組みが直面せざるをえない基礎的問題を顕在化させることこそが目指されているのである。

さて、『文化のダイヤモンド』第一章において、グリスウォルドは、「考えられ、知り得た最高のもの」という、芸術に結びついた文化の定義や「人類の創造物の総和」といった広い定義を考慮した上で、「人間生活の表現的な側面」として文化を位置づけている。そして、「文化表象体(cultural object)」が分析の主対象とされる。それは形態に具体化された共通の意義のことである。彼女の議論は、創造者と受容者、文化表象体、社会的世界などといった諸要素やそれらの関係を手がかりとして分析を行うことを提案する。一方では、各要素についての言及がなされており、例えば文化が集団的に形成されることについて指摘がなされている。他方では、諸要素が取り結ぶ複雑な諸関係のバリエーションが問題となる。例えば、社会的世界と文化表象体の関係については、一方的な決定関係ではなく、相互的な調整の関係が想定されている。また、創造者と受容者との関係については、生産、分配、受容が注目されており、文化に対する生産の手段や過程の影響、文化産業システム、フィードバックなどが言及されている。ただし、グリスウォルドの図式は、創造者と受容者、文化表象体と社会的世界の関係のみを問うものではない。創造者と社会的世界の関係に関わる問題としては、ある種の人々が文化創造から排除されることなどが考えられる。また、文化の創造者が、自分の属する社会的世界やそれと相互作用するコミュニティ(サブカルチャーでもありうる)の両者に影響されることもこの系列の問題となる。

3.2. いくつかの補足

次に、この図式について簡単な補足説明を行っておく¹⁵。第一に、社会的世界と文化表象体の関係において留意すべきなのは、この図式が反映モデルに関連していることである。著作の二章において文化と社会の関係としてグリスウォルドが想定しているのは、文化的意味が社会構造を反映し、社会構造が文化的意味に反応するという関係なのである¹⁶。現代では構築主義批判も現れているけれども、グリスウォルドによって採用されているのが反映論であることは、良くも悪くも、注意すべき点であろう。第二に、グリスウォルドの文化分析は、意味を重視するという特徴を持っている。この特徴は、採用された文化概念に由来するものと思われるが、こうした方法が現代においていかなる有効性を持つのかという点は、検討されてよいであろう。もっとも、グリスウォルド自身、この点を意識しており、著作を閉じる前に、彼女は、深さや物語性を欠く断片的な現代「文化」に言及している。そこで彼女は、創造者と受容者、文化表象体と社会などの

諸要素について問うことは、中心の存在しない現代の諸文化にも有効であることを示唆している。しかし、それらの問いが今なお有効であったとしても、意味や反映を重視した図式の有効性が立証されたことにはならないものと思われる。第三は、二項対立の問題である。冒頭で言及したストーリーの著作を、グリスウォルド的な図式と比較すると、留意すべき点が鮮明になる。ストーリーの著作第七章には上部構造と下部構造、創造と消費といった二項対立への批判が含まれていた。モード、メディアのイメージ、デザインなどによって創出される差異と変調が商品への欲望を喚起する現代において、経済と文化を分割することは困難である。また、グリスウォルド自身が意識しているように、受容研究の進展は、受動的な消費者という固定観念に疑問を投げかけてもいる。これらの点は、文化表象体と社会的世界、創造者と受容者などの区別を考える上で考慮すべきものである。第四に、この図式は一種の理念型であり、実際の分析を行うなかで修正され、補足されるべきものであろう。具体的な分析において、この図式は、階級、ジェンダー、エスニシティが交差する事態に出合うかもしれない。この図式はまた、歴史と関連付けられることであろうし、植民地主義やそれ以後の状況における社会的世界や文化表象体に適用されるかもしれないのである。

あえてオーソドックスな枠組みから出発しつつ、それに論評を加えてきたわけである。二項対立ないし二分法への批判は、古くて新しい問題であったが、近年では既視感を伴うものとなっている。けれども、それは思考の枠組みを考える際に避けて通れない問題であり、ここでは、整理のためにも言及してきた。もっとも、このような概念的区別に関する考察がつねに既視感を伴うわけではない。例えば、アクター・ネットワーク理論に関する著作を記したラトゥールは、文化と自然、人間と非人間といった区別に対する疑義を提示している。彼の問題提起は、二項対立に関わるものでありながら、新機軸を含むものである。文化という言葉の歴史を考慮すれば、文化と自然に関わる彼の議論が文化分析の基礎に関連することは明白である。しかし、彼の議論は、日本における文化分析の文脈で、十分に検討されているとは思われない。以下で私たちは、文化社会学やカルチュラル・スタディーズの外部に赴き、関連する諸問題の検討に着手することにした。

3.3. 文化／自然

B. ラトゥールは、人間／非人間の二元論が近代的な「純化(purification)」の実践の帰結であることを指摘している。これに対置されるのは、自然と文化のハイブリッドからなるネットワークであり、それらを生み出す「翻訳(translation)」の作用である(Latour, 1993:11)。地球温暖化をめぐって彼が挙げている例によると、後者の「翻訳」では、大気上層の化学反応や、科学的・産業的戦略、国家元首の関心事、エコロジストの懸念などが持続的な連鎖において結合されるであろう。他方、「純化」ないし「近代的な批判の立場」¹⁷においては、常にそこに存在してきた自然的世界、予想可能で安定した関心や利害関係のある社会、指示対象や社会から独立した言説の間に仕切りが設定されることであろう¹⁸。もっとも、「純化」／「翻訳」という対比それ自身が二元的区別に依拠するものであり、その意味で、この議論が近代的であることは著者自身によって意識されている。ただし、双方の実践は互いに相補的なものと位置づけられている。また、ハイブリッドを禁ずれば禁ずるほど、異種交配が可能になるという近代のパラドックスをラトゥールが指摘している点を忘却すべきではない。

狭義の文化分析の内部にこの議論を位置づけることは困難であろう。しかし、彼の議論は、自然や文化、自然や社会といった概念の存立基盤に関わるものであり、その意味で文化分析の基盤と交差する。したがって、文化の研究に従事する者の立場から、彼の議論の含意が検討されてし

かるべきものと思われる。実際、そのような検討の試みが、既にT・ベントによってなされている(Bennett, 2007)。彼の論考の狙いは、アクター・ネットワーク理論をモデルとして新たな文化分析の方向を見出すことである。さらに彼は、カルチュラル・スタディーズにおいて中心的であるが、彼にとって疑問の余地のある前提や先入観にかわる方法を提示しようとする。では、ベントの注目している論点を中心として、ラトゥールの議論を確認することにしたい。

ラトゥールは、人間の集合(社会)から物の集合(自然)を分割するモデルに対して批判的である。したがって、文化と社会の関係を分析するために彼の著作を参照することがパラドクサルな企てであることをベントは認める。人間の集合内部の下位区分として、社会的なものから文化を区別しようとする関心は、ラトゥールが根気よく揺るがそうとしてきた近代的解決の別の側面なのである。彼の立場は、常に同時に自然的で社会的で文化的かつ技術的であるような集合体へと、人間と非人間が集められる過程を重視するものであり、自然や社会、文化といった観念への依存は否定的に評価される。もっとも、自然と文化の分割には、いかなる確実な認識論的基礎も認められないが、「公的な組織化の形態」として理解された場合、それには歴史的な力が認められる。この時、ラトゥールは自らの立場を緩和してもいる(Bennett, 2007:611-612)。

3.4. 「社会的なもの」の困難

ベントによれば、同様に、「社会的なもの(the social)」の概念についてラトゥールは以前よりも聖像破壊的ではなくなっているという。もし社会的なものという概念が人間と非人間的なアクタンの諸関係の固定された束として考えられるのなら、主要な困難は社会的なものの概念に存するわけではないと考えられているからである(例えば、中産階級と芸術作品の結びつきやディスタクシオンの組織化など)(Bennett, 2007:612)。ただし、ラトゥールは社会的なものが特殊な物質のように見なされた場合に生じる問題を指摘してもいる。すなわち、非社会的な現象から区別されうる、弁別的で「社会的な物(social stuff)」のようなものと考えられる場合、問題が生起するというのである。これは何を意味するのだろうか。

ラトゥールによれば、社会理論が彫琢されていた前世紀の重要課題は、経済学、地理学、生物学、心理学、法学、科学、そして政治学といった領域から、社会に関わる現実の領域を区別することであった。純粋に生物学的、言語学的、経済学的、自然的ではないような否定的な特徴を持つ場合、所与の特性は「社会的」であるとか「社会に関連する」などと述べられた。逆に、社会秩序を完成し、強化し、維持し、再生産するような、積極的な特徴を持つ場合にも「社会的」という言葉が用いられた。いったん領域が定められると、どれほど曖昧であろうと、社会現象に光を照射するものとして、「社会的」という言葉が用いられるようになる(社会的なものが社会的なものを説明しようというトートロジー)。さらに、他の領域の知見では説明しえないことを説明するために、社会に関わる言葉が用いられる(Latour, 2005:3)。

ラトゥールは、この種の発想の例を執拗なまでに挙げているが、ここでは一部のみを紹介しよう。例えば、それ自身の論理のもとに経済的な諸力が展開していくが、抜け目ない行為者のいくぶん気まぐれな行動を説明しようとする社会的要素が存在するという発想。また、科学にはそれ自身の起動力があるけれども、その探求の主たる特徴は、科学者たちの「社会的な諸限界」によって制約されているという見解。さらに、芸術は概ね「自律的」であるとはいえ、傑作のある側面を説明しようとする社会的・政治的な考察に、芸術は影響を受けてもいるという思考等(Latour, 2005:3)。ラトゥールは、この種の「社会理論」が、社会科学者であれ、一般のアクターであれ、精神的なソフトウェアの初期設定に、さらには常識にまでなっていると。「文化」を、それから区別されうる「社会的なもの」によって説明する時、このような陥穽は文化社会学の困難でもあるだ

ろう。

これらの場合、「社会的」という言葉は、動的な関係から切り離された同質的な物を指し示すために漠然と用いられているようである。しかし、同じ「社会的」という言葉によって異種混交的な諸要素間の諸結合の痕跡を指示することが可能であるとラトゥールは指摘する。この場合、「社会的」という言葉は、諸物の中のある物を指すのではなく、それ自体は社会的ではないような諸物の関係のタイプを意味している(Latour, 2005:5)。ラトゥールにとっての「社会的なもの」は、常に既にそこにあるようなものではない。むしろ、それ自体は決して社会的ではないような諸要素の間に新しい「諸関係(associations)」が生み出されたとき、その結びつきが種々の痕跡を残すのであり、それらの痕跡によって社会的なものは可視的になる。こうして、ラトゥールの試みは、「社会的なものの社会学」に対して、「アソシエーションの社会学(sociology of associations)」,あるいは「アソシエーション学(associology)」と名指されることとなる(Latour, 2005: 8-9)。

3.5. 文化の关系的な唯物論

ANTを撰取した後、ベントは、ラトゥールやロウとは独立に、文化分析にとっての含意を抽出しようと試みた。ここで、ベントが導き出した論点の一部をまとめておきたい。ベントは、弁別可能な「文化的な物(cultural stuff)」（表象など）から構成されるものと文化を見做すのではなく、あらゆる種類の「断片的なもの(bits and pieces)」の暫定的な集合として文化を位置づける。それらの断片的なものは、永続的な種々のネットワークへと形作られるのであり、種々のネットワークの様々な相互作用が、人と物の特殊な種類の公的組織化としての文化を生産する(Bennett, 2007:612-613)。「文化」という同質的なカテゴリーを前提として議論を始めるのではなく、異質な諸物の絡み合いから出発すること。その錯綜においては、社会や文化に予め割り当てられた区別など存在しない。

この議論の背景には、実体論ではなく関係論的な発想がある。ただし、それは物質と結びついたものである。ANTは、実体が形成され、動員される物質的セティングや道具に注意を払う唯物論を形成する。ANTにおいてベントは、「关系的な物質性」とJ・ロウが呼ぶ発想に注目している。それは、人間と非人間のアクターからなる種々のアッサンブラージュに関連する言葉である。アッサンブラージュでは異なるものが寄せ集められているのであるが、注目すべきは、諸要素が協働する仕方である。たとえば、語りや建築、身体、テキスト、機械といった断片的なものからなる、物質的に異種混交的なものが相互作用するのであり、それらが社会的なものを構築し、遂行すると考えられる。こうした思考は「关系的な唯物論(relational materialism)」と呼ばれる(Bennett, 2007:613)。

一方で、ベントは、ANTの关系的な唯物論とS・ホールにおける節合の概念に共通点を見出す。両者において、諸要素のアイデンティティと効力は内在的特質としてではなく、関係のネットワークに由来するものと見なされているのである。他方で彼は、相違点を指摘する¹⁹。ANTが非人間的なアクターをネットワークのなかに組み入れているという点である。これによってANTは、拡張され、より説得力のある唯物論的な分析領域になっているとベントは評価する。さらに、文化性が集合に由来するような、異種混交的要素のアッサンブラージュに焦点を絞ることによって、意味を生む意味体系としての文化といったトートロジカルな説明を回避できると彼は指摘する(Bennett, 2007:613)。

これ以外にも、ベントが留意している点がある。例えば、ANTは、深層構造や隠れた構造を探究するのではなく、可視的な表面に、観察可能な出来事や行為や過程に注目する。問題となるの

は、交差するネットワークにおける人と物の複雑な錯綜である。ただし、そのネットワークにおいては、社会や文化といった区別は存在していない。この意味において、文化が社会的なものを構築するという構築主義的発想と ANT の思考は異なることが指摘される (Bennett, 2007:614)。

3.7. 残された課題、あるいは新しい文化社会学に向けて

2003年から2004年にかけて、英語圏ではホール論の刊行が相次いだ。そして、2007年には、CCCS Selected Working Papers が刊行された。さらには、S. ラッシュが「第二派カルチュラル・スタディーズ」について記し、その後、T. ベニトが「カルチャー・スタディーズ」の方向性を示した。二人の主張の妥当性はともかくとして、少なくとも彼らが文化分析の枠組みについて問い直しを行ったことは確かである。本稿では、両者の比較はあえて行わず、ベニトの論考で扱われた問題を中心に ANT が文化分析にとってもつ含意の輪郭を描きだすことを試みた。

結局のところ、ベニトが重視するのは、組織化の形態として理解された文化であり、彼の関心は、文化が異種混交的な要素のアッサンプラージュによって産出され、維持される仕方を説明することにある。このことを考慮すれば、ベニトが公的な教育プログラムとしての Bildung における節合を論じたことは興味深い。それには様々な施設（公共図書館、コンサートホール、ミュージアム、アートギャラリー、展覧会）が関連しており、その施設は人間と非人間のアクターの関係の新たなネットワークを組織化するものと見做されているのである。

意味を担う物や行為から異種混交的な集合体に対象を変えること。この変更によって、文化分析はアクター・ネットワークの分析になるのであろうか。あるいは文化分析は依然として可能であるのか。回答は、論者によって異なるのかもしれない。雑誌『カルチュラル・スタディーズ』に掲載された論文で、ベニトは自らの試みを「カルチャー・スタディーズ(culture studies)」と呼んだ。彼の提案した言葉が、今後、どれほど普及するかという点について我々は十分に慎重であってよいと思われる。さしあたり重要なのは、彼が「カルチャー・スタディーズ」という言葉を用いたことである。ANT を経過した後も、彼は文化分析を放棄しなかったのである。また、彼の試みは、従来のカルチュラル・スタディーズやアクター・ネットワーク理論とは異なる言葉で指し示された。これらの点に留意しつつも、我々はさらに彼の議論を吟味する必要があるはずである。ベニトが ANT から導き出した論点や立場はどのように相対化されるのであるか。また、ベニトのような問題提起がホール以降のカルチュラル・スタディーズにとってもつ含意とは何か。それはいかなる新機軸を生み出し、いかなる陥穽を伴っているのか。本稿では、ベニトの論考を導きの糸としながら ANT が文化分析に提示する問題を検討してきた。しかし、文化の定義から議論を始めたために、議論が尽くせなかったかもしれない。また、そもそも本稿で取り上げた問題は、長期的な取り組みが必要となる問題のようにも思われる。

最後に気のついた点を記しておく。第一は、言葉の包括性に関する問題である。同質的な概念ではなく、諸物の絡み合いから出発すること。この指摘には確かに鋭いものがある。しかし、文化の包括的定義がその広さによって概念としての意義を欠く危険性があったことを想起すれば、人間と非人間を包み込む異種混交的なネットワークという言葉にはいかなる危険が随伴するのか、この点について筆者は一抹の懸念を抱かないわけではない。第二はメディアに関する問いである。ANT を経過した文化分析にメディアを位置づけるという迂回した戦略をとるならば、いかなる問題点が炙り出され、いかなる分析が可能になるのか。すでに、ANT の立場からメディアを論じた論考が提示されているが、それらとは異なる視点が導き出されるであろうか。第三は日本の文脈で「文化」をいかに考えるかという問題である。本稿の前半では、文化をめぐる用法を簡単に整理した。日本における「文化」という言葉の歴史も考慮すべきであるが、文字数の制

約により関連する記述を削除した。たとえば社会学研究会が1930年代に文化社会学に関する著作を刊行している。戦前の日本における文化をめぐる言説からいかなる「文化」の用法が浮彫りとなるのか。またそれらの議論をどのように再読できるのか。

注

- 1 グリスウォルドの想定しているのは、野球のダイヤモンドである。なお、Griswoldの表記については、混乱を避けるため、「グリズウォルド」とはせず、邦訳書の表記に従っている。
- 2 ラッシュの提示した図式では、第一波カルチュラル・スタディーズが、存在論と対立するものとしての認識論的な領域に留まるのに対し、第二派カルチュラル・スタディーズにおいては、認識論と結びついた存在論的なものを重視するという対比が提示されている。後者の枠組みに対応するような形で、従来のヘゲモニー論とは異なる新たな権力論が説明されるのである。しかし、「ヘゲモニー以後の権力」と題されたこの論考が掲載された『理論、文化と社会』誌上では、反論も掲載されている。そこでは、ラッシュの想定するヘゲモニー論のヴァージョンは、1980年代におけるポスト・アルチュセールの言説理論とフーコーの権力論が特定のグラムシ読解と出会った時期の解釈であることが指摘されているのである (Johnson, 2007:100)。なお、相互関係は不明であるが、本稿の後半で扱うベニトによる論考の最終セクションは、「文化の存在論的政治」という見出しがつけられている。もちろん、立場の相違を思わせる記述もある。
- 3 ストーリーの指摘によれば、1950年代から1960年代における英米のポップアートは、高級文化と民衆文化という区別を否定していた。それは、「考えられ、言われてきたことの最上のもの」といったアーノルド的な文化の定義を拒絶し、ウィリアムズ的な生活様式としての文化という定義を好んだ。
- 4 *Reassembling the Social* (2005) の副題を邦訳すれば、「アクター・ネットワーク理論入門」となる。なお、ミシェル・カロンは、『翻訳の社会学』における論考で、「アクター・ネットワーク理論(actor-network theory)」を「アクター・ネットワークの社会学(sociologie de l'acteur réseau)」と仏訳している。
- 5 Bennett の日本語表記に際しては、当初、「ベネット」としていたものの、『固有名詞英語発音辞典』(三省堂)を参照した上、「ベニト」とした。
- 6 F. イングリスは、文化概念について概観する前に、概念それ自体についての考察から始めている (Inglis, 2004:3-5)。「～はXである」という語の定義を重視する見解に対して、ここでは言葉の使用を重視する見解が意識されていると思われる。グリスウォルドの場合、文化には様々な意味があるため定義をしてから議論をする必要があるとしている。このような見解は、一見、まっとうなものであるが、文化という言葉をもちいて実際の分析を遂行することを重視する立場、つまり、正確な語義やその源泉としての語源に向うのではなく、文化という言葉を使って具体的な事象の分析をすることから出発する立場も考えられるのではなからうか。しかし、言葉の意味を辿ることも分析の実践である。また、具体的な文化的事象の分析において固定的な意味に拘束されることも考えられよう。
- 7 ラテン語の「cultura(耕作)」の語源はラテン語の colere であり、住む、耕す、守る、敬い崇める、などの意味をもっていたという。
- 8 フランスにおいて、culture は、13世紀末に、耕作された土地の区画を意味する言葉として現れる。16世紀初めになると、もはや「状態(耕作された状態)」を示すことはなく、「活動」を、すなわち土地を耕す行為を意味するようになる。能力の育成を指示しうる culture の比喩的な意味が形成されるのは16世紀の半ばにすぎないという。しかし、17世紀末まではこの比喩

- 的な意味はあまり日常的ではなかった(Cuche, 2001:8)。
- 9 この転用の意味は一つの問いになりうる。当時、既に人間と自然が対立的に把握され、その後、そうした区別を横断する転用がなされたのであろうか。あるいはそうした転用が示すのは、人間と自然の連続的な捉え方であらうか。
 - 10 『文明化の過程』におけるノルベルト・エリアスによれば、ドイツ語において、「文明化」は、有益ではあるものの、外面や表面だけに關わる二流の価値を意味する。これに対して、「文化(kultur)」は、自己の業績や本質を表現する際に用いられる言葉である。それは、「精神的、芸術的、宗教的事実」に關わっているのであり、「政治的、経済的、社会的事実との間に、強固な障壁をめぐらす」強い傾向を持っているのである。なお、ドイツ語における「文化(kultur)」については、言葉の用法のみならず、フランスで重視される「文明化」との対抗關係を、したがってまた国家的なレベルにおける対抗關係をも忘却することはできない。なお、文化と文明との対比については、フィリップ・ベネトンの研究もあるが、西川(2001)でも言及されている。
 - 11 本稿執筆の際、邦訳をおおいに参照させていただいた。ただし、本稿執筆にあたっては、*Keywords* 原文を参照し、適宜、訳語を変えている。
 - 12 なお、岡崎康一の訳では secular process は「世俗的過程」となっている。
 - 13 情報技術の普及した現代の社会において、このような文化と文明の二分法は説得力を失った。他方、形をかえて存在しているようにも見える。
 - 14 「人類学の意味」と訳されている部分は、原書では ethnographic sense という言葉である。
 - 15 グリスウォルドは、この図式を活用するなかで様々な議論を盛り込んでいるが、ここでの私たちの論評は、あくまでも、図式それ自体に向けられている。
 - 16 なお、第三章では、社会が集合表象としての文化に一方的に影響を与えたとする見解が単純な反映論と述べられている。この見解では、個人としての創造者は想定されていない。
 - 17 英訳では、「近代の批判的立場(modern critical stance)」と書かれているが、仏語原文で、これに対応する言葉は「批判(critique)」である。
 - 18 E.O.ウィルソン、P.ブルデュー、J.デリダに言及しつつ、ラトゥールは、自然化、社会化、脱構築などといったアプローチは、それぞれが強力であるが、他のアプローチと結合できないことを指摘する。たとえば、ウィルソンが自然化された現象について語る場合、諸社会や諸主体、そしてあらゆる形態の言説が消え去るとラトゥールはいう。そしてブルデューが権力の場について語る時、科学、技術、テキスト、そして活動の内容が消滅するとラトゥールは指摘する。さらに、デリダが、真理の諸効果について語る時、脳のニューロンないし権力の戯れの現実的な存在を信じることは途方もないナイーブさを露呈することになるという(Latour, 1993:5-6)。これらのアプローチでは、そのままでは、自然化され、社会化され、脱構築されたオゾンホールの研究は困難である。
 - 19 述べたように、ベニトは、非人間的なアクターをネットワークに編入する ANT とホールの節合理論を対比的に論じている。このとき、彼はイデオロギー的な節合を念頭においているのである。例えば、あるイデオロギー的な言葉が、特定の文脈ないし言葉の集合から切りはなされて、別のイデオロギー的な文脈に位置づけられるとき、異なる政治的な意味を帯びる等。他方、ホールのエンコーディング/デコーディング・モデルには節合理論が含まれていた(Pillai, 1992)。それは ANT とは異なる枠組みで展開されたものであったが、このヴァージョンの節合理論が人間と物質の双方に關わるものであることをベニトは言及していない。

【引用・参考文献リスト】

- Assmann, A . 2001 *Herder zwischen Nationalkulturen und Menschengedächtnis* (= 2001年 , 内野健訳「国民文化と人類記憶の間 ヘルダーの場合」, 臼井隆一郎・高村忠明編『記憶と記録』東京大学出版会 , 283 - 302頁。)
- Bennett, T 2007 “ Making Culture, Changing Society: The Perspective of ‘ culture studies ’ ”, *Cultural Studies* Vol.21 , Nos.4-5 July/September, pp.610-629.
- Bocock, R . 1995 “ The Cultural Formations of Modern Society ”, S. Hall et al. , *Modernity*, Polity Press , pp.149-183.
- Cuche, D . 2001 *La Notion de Culture dans les Sciences Sociales*, La Découverte.
- Elias, N . 1969 *Über den Prozess der Zivilisation* (= 1977年 , 赤井慧爾・中村元保・吉田正勝訳『文明化の過程 (上)』法政大学出版局。)
- Geertz, C . 1973 *The Interpretation of Cultures*. (= 1987年 , 吉田禎吾・柳川啓一・中牧弘允・板橋作美訳『文化の解釈学 []』岩波書店。)
- Griswold, W . 1994 *Cultures and Societies in a Changing World*, Pine Forge Press. (= 1998年 , 小沢一彦訳『文化のダイヤモンド』玉川大学出版会。)
- Inglis, F . 2004 *Culture*, Polity Press .
- Johnson, R 2007 “ Post-hegemony ? : I Don’t Think So ”, *Theory, Culture & Society*, Vol.24(3): 95-110.
- Lash, S . 2007 “ Power after Hegemony: Cultural Studies in Mutation ? ”, *Theory, Culture & Society*, Vol.24(3):55-78.
- Latour, B . 1997 [1991] *Nous n’avons jamais été modernes*, La Découverte .; 1993 , *We Have Never Been Modern*, Harvard University Press.
- 2004 *Politiques de la Nature*, La Découverte.
- 2005 *Reassembling the Social : An Introduction to Actor-Network-Theory*, Oxford University Press.
- 門部昌志 2006 「『透明なコミュニケーション』をこえて」, 『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』第7号。
- 西川長夫 2001 『増補 国境の越え方』平凡社。
- Pillai, P . 1992 “ Rereading Stuart Hall’s Encoding/Decoding Model ”, *Communication Theory*, vol.2 , no.3 , pp.221-233.
- Storey, J . 1993 *An Introductory Guide to Cultural Theory and Popular Culture*, Harvester Wheatsheaf .
- Tylor, E. B . 1873 *Primitive Culture*. (= 1962年 , 比屋根安定訳『原始文化』誠信書房。)
- Williams, R . 1983 *Keywords*, Fontana Press. (= 1980年 , 岡崎康一訳『キーワード辞典』晶文社 ; 2002年 , 椎名美智・武田ちあき・越智博美・松井優子訳『完訳 キーワード辞典』平凡社。)